HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	徳田秋聲『縮図』論 : 「遊女」の職業遍歴
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	層 : 映像と表現, 17, 44-60
Issue Date	2025-03-07
DOI	https://doi.org/10.14943/112699
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94232
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_04_p44-60.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

徳田秋聲『縮図』論

――「遊女」の職業遍歴

水溜　真由美

1　はじめに

徳田秋聲『縮図』（小山書店、一九四六年）[1]は、元芸妓で現在は白山の芸妓置屋の女将である銀子の半生を描く作品である。初出は一九四一年六月二八日から同年九月一五日まで『都新聞』に連載された。ただし、戦時下の厳格な言論弾圧を背景として連載八〇回で中断を余儀なくされ、秋聲の死後に未完のまま書籍化された[2]。

徳田秋聲は下層階級の女性を描くことに長けた作家である。秋聲研究の大家である野口冨士男は、正宗白鳥による「秋聲がえがく女はどれもこれも同じようで、いっこう変りばえがしない」という趣旨の批判を退けつつ、「市井の庶民的な女をえがいては、やはり秋聲の右に出る作家はない」と評価している[3]。

下層階級の女性の流転する人生を長期的なスパンで捉え一代記的な構えの作品を描くことも秋聲の作品の特徴である。芸妓の半生記である『縮図』のほか、洋服屋となる女性の立志伝である『あらくれ』（一九一五年）[4]、秋聲の妻である小沢はまをモデルとする女性の人生を描く『足迹』（一九一二年）[5]および『黴』（一九一二年）[6]などには、その傾向が強く見られる。

『あらくれ』のお島に顕著であるが[7]、一代記的な構えの作品に描かれる女性は多かれ少なかれ職業を転々とする。こうした物語の設定は秋聲の好みや世界観に還元されるわけではない。

戦前日本において、下層階級の女性は、女学校卒業後に結婚して専業主婦となった大多数の中流階級以上の女性と異なり、生産労働に従事することを余儀なくされた。生産労働といっても、農民を除けば、一つの職業に従事し続けることや一つの職場に止まり続けることは稀であった。また、たとえ農民であっても小農や貧農の娘は、一定の年齢に達すると家計を助けるため、借金を形にして工場や遊廓などに年季奉公に出されることが珍しくなかった。

ところで、戦前日本の下層階級の女性にとって、芸娼妓や酌婦などの「遊女」は[8]、女中や「女工」などと並ぶ身近な稼業であった。『縮図』以前に書かれた秋聲の作品にも、芸娼妓や酌婦が登場するものが少なからず存在する。

たとえば、『爛』（一九一三年）[9]の主人公のお増は元「遊女」である。物語の開始時点で、お増は浅井の妾となっているが、元々浅井はお増の客だった。作中には、お増のかつての朋輩で、現在は青柳という芸人の妻になっているお雪も登場する。また、出世作の『新世帯』（一九〇九年）[10]では、主人公の新吉の友人である小野の妻のお国が、夫が逮捕された後に転がり込んだ新吉の家を追われた後、「遊女」になる可能性が示唆される。『足迹』では、主人公のお庄が女中仲間のお鳥の誘いによって浅草に「茶屋奉公」に出るものの、周囲の反対に遭い、まもなく店を辞める。一方で、「田舎へ流れて行つた」お鳥は、「お前さんなんざまだ幼だから、行けばきツと流行りますよ」と言って、お庄に「田舎」に来て「遊女」になるように誘う。お庄はお鳥の誘いに応じないが、後に「古い料理屋」に嫁入りする。夫の母親は元品川の芸妓であった。

このように、秋聲は多くの作品の中で、「遊女」を下層階級の女性にとっての身近な職業の一つとして描いているが、『縮図』は、秋聲の代表作のうち「遊女」を主人公に据えた初めての作品である。本稿では、秋聲の他の作品に描かれる女性たちの職業遍歴とも関連付けながら、銀子の職業遍歴に注目しつつ『縮図』を再読する。そのことを通じて、『縮図』を「遊女」を労働者として描く作品として位置づけたい。

2　『縮図』の執筆背景

徳田秋聲が『縮図』を執筆したのは、秋聲の晩年の愛人であり、銀子のモデルとなった小林政子の存在によるところが大きい。一九三一年七月、六一歳だった秋聲は、白山の富島家から富弥の名で出ていた二六歳の政子と座敷で出会った。当時、政子は四年間の結婚生活が破綻して芸妓稼業に戻ったばかりだった。一九三二年五月、秋聲と政子は半ば同棲の形となり、七月

には政子が芸妓を廃業した。翌年、『東京日日新聞』は二人の同棲生活を結婚の可能性を含めて報じたものの結婚には至らず、政子は芸妓稼業に戻り、一九三三年末に芸妓置屋の富田屋を開業した[11]。ただし、その後も秋聲と政子の関係は続き、秋聲は亡くなる少し前まで本郷の自宅と富田屋を行き来する生活を続けた。『縮図』は秋聲の仕事場でもあった富田屋の二階で執筆された。

『縮図』は政子の身の上話に基づいて書かれた作品であるが[12]、本作には政子や『仮装人物』の狭山小夜子のモデルである柘植そよのほか[13]、秋聲が様々な「遊女」に接した経験が影響している。政子の住む富田屋に足繁く通った秋聲は、置屋の旦那に近い立場で政子の抱えの芸妓に接した[14]。また、一九三五年には長男の一穂が玉の井で働いていた酌婦の逃亡と廃業を助けたうえ、しばらく実家に同居させた[15]。これらは、秋聲が「遊女」稼業の舞台裏を知ると共に、女性の人生の中での「遊女」稼業の位置づけを再考する機会になったと考えられる。秋聲は『縮図』の連載開始前の打ち合わせの際に、「今迄沢山の人が芸妓の小説を書いた。しかし誰も芸妓の生活を書いた人はゐない。ひとびとが書いたのは芸妓の感情であつた。私は芸妓の生活を書きたい」と語ったという[16]。

なお、秋聲は『縮図』以前に、政子をモデルとする女性が登場する「正子（しょうこ）もの」と呼ばれる一連の作品を発表している。「死に親しむ」（『改造』一九三三年一〇月）、「一つの好み」（『中央公論』一九三四年四月）、「一茎の花」（『文藝春秋』一九三四年七月）、「稲妻」（『行動』一九三四年一〇月）、「部屋、解消」（『中央公論』一九三五年三月）、「二つの現象」（『婦人之友』一九三五年五月）、「チビの魂」『改造』（一九三五年六月）、「裸像」（『文藝春秋』一九三五年九月）、「生きた煩悩」（『改造』一九三七年一月）、「のらもの」（『中央公論』一九三七年三月）などがそれに当たる[17]。『縮図』では、秋聲の分身でありながらも虚構を交えて設定された三村均平が登場し、愛人の銀子から身の上話を聞き出す役割を担う。他方で、「正子もの」の多くに登場する秋聲の分身と見られる人物は、均平と比べると虚構性が少なく、より私小説的に描かれている。ともあれ、「正子もの」は『縮図』を考察する上で無視することのできない作品群であり、本稿でも適宜参照したい。

3　銀子の職業遍歴

冒頭で述べたとおり、『縮図』は銀子の一代記の性格を持つ作品である。作品の前半では秋聲の分身である三村均平が登場し、芸妓置屋を営む愛人の銀子との日常が描かれる。銀子の身

の上は、主として二人の会話の中で、銀子が均平の質問に答える形で語られる（三人称小説の形で書かれている部分もある）。しかし、第四章「素描」[18]の途中からは、銀子を視点人物とする三人称の年代記小説に移行する。ただし本作は年代記小説の途中で連載が打ち切られ、秋聲の死後に未完のまま書籍化されたため、物語は均平と銀子の現在に回帰しないまま終わっている[19]。

物語の現在における銀子は三〇代半ばと推測されるが、年代記小説の部分は銀子が二〇歳の時点で中断している。もっとも、前半部分から、物語が中断した後の銀子の人生を、ある程度たどることができる。以下、時系列にそって銀子の職業遍歴を見たい。

銀子の父親は上州出身の製靴職人であり、銀子が生まれて間もない頃に妻と幼い銀子を連れて上京し、各地を転々とした後、柳原（江東橋）で靴屋を開いた。銀子は姉妹の中でも器量が良かったため幼い頃に「芸者屋の仕込み」に出されたが、芸者屋の「空気になじまず」、親元に逃げ帰って内職を手伝うなどしていた。しかし、父親が「競馬道楽や賭け事で摺つた果てに」怪我をして一時仕事ができなくなり一家離散の危機がせまったため、芸者屋に戻ることを余儀なくされた。もっとも、芸者屋を嫌う銀子は、一四歳の頃には蔵前の大きな靴屋で住み込みで徒弟奉公をして製靴の技術を身につけた。しかし、靴職人としての手間賃だけでは家族を支えきれず、千葉の蓮池にある藤本の抱え芸妓となった。そこで銀子は栗栖という若い医者と関係を深めるが、同時に藤本の主人である磯貝の後妻候補になった。やがて銀子は栗栖と磯貝との三角関係に嫌気がさし、芸妓稼業をやめて靴職人に戻った。

しばらく銀子は靴屋を営む実家で父親と共に製靴の仕事をしていたが、実家の経済状態が好転しなかったため、I―町（石巻）にある分寿々廼家に抱えられた。分寿々廼家では土地の富豪である倉持という青年が銀子のパトロンとなり、銀子との結婚を熱望するようになった。しかし倉持が高利貸の娘と結婚したため、銀子は東京に戻って芳町の春よしに住み替えをした。春よしでは、若い株屋の若林が銀子のパトロンとなった。やがて銀子は急性の肺炎と腹膜と腎臓の併発症を患って生死の境をさまよい、五ヶ月間、錦糸堀の実家で病床に伏した。しかし徐々に回復し、再び座敷に出るようになった。『縮図』の年代記小説は、この辺りで中断している。

この後の銀子の人生について、作品の前半部分では、浅草の置屋にいた時期に引手茶屋の二男坊の木元と知り合い結婚し深川で世帯を持ったこと、木元は「遊びや花が好きで、金使いが荒」く、銀子は家計を維持するため、しばらく銀座のカフェー

で女給として働いたこと、四年間で結婚生活が破綻したことなどが語られている[20]。なお、「正子もの」の一つである「のらもの」は、元芸妓の晴代と引手茶屋の子息で材木商の木山との四年間の結婚生活をめぐる物語だが、二人の関係は『縮図』における銀子と木元の関係と、ほぼ一致している。

さて、銀子は木元との結婚が破綻した後、芸妓稼業に戻った。その後、白山の松の家から看板借りの形で座敷に出ている時に均平と知り合い、「家をもつた」ものの、均平の子供との関係に難儀したことなどから一年ほどで芸妓稼業に戻った。そのうちに松の家の主人の松島が亡くなったため、銀子は遺族と相談の上で松の家の近所に置屋を開業した。均平とは置屋を開業した後に復縁し、現在は均平が銀子の営む置屋の二階に居候するような関係となっている。資産家の入婿（妻は他界している）とされる均平の設定には多くの虚構が含まれるものの、銀子との関係は概ね秋聲と政子の関係に基づいている。なお、秋聲と銀子の出会いから同棲を解消するまでの経緯については、「正子もの」では、「一つの好み」、「一茎の花」、「部屋、解消」に描かれている。

見てきたように、銀子が経験した職業は、靴職人、芸妓、女給、芸妓置屋の女将であり、芸妓としては何度も住み替えを行っている。手に職を持つ銀子は靴職人として身を立てることが可能だったように思われるが、家族を養うため、靴職人よりも多くの収入を得られる芸妓稼業に従事することを余儀なくされた[21]。その背景には、子供が家計を支えることが自明であるとする前近代的な家族観念が、銀子を含めて家族の間で共有されていることが指摘できよう[22]。

4　職業遍歴と男性遍歴

ただし、銀子に職業遍歴を促す要因は家庭の事情のみではない。銀子は年代記小説の部分で、わずか数年の間に、蓮池の藤本、I―町の分寿々廼家、芳町の春よしの三つの置屋の抱え芸妓となっている[23]。銀子が藤本を辞め、分寿々廼家から春よしに住み替えた直接の原因は男性との愛情関係の縺れにある。

銀子が藤本を辞めた理由は、磯貝および栗栖との三角関係に疲弊したためである。磯貝は藤本の主人であり、主人の立場を利用して銀子に関係をせまった。銀子がまだ披露目をして間もない頃、客から狐拳による「罰杯のコップ酒」を強いられたために置屋に戻ってから酔い潰れていたところ、磯貝の「両手に抱かれ」、二階の部屋に寝かされた。銀子に酔い潰れてから後の記憶はないが、「二階で親爺に介抱されたような気もするがあのくり〳〵した目で見てゐられたようにも思はれ、それが幻

覚であつたやうにも思はれた」（『全集』第十八巻、三一七頁）、「一昨日の晩のことが夢のやうに頭脳に残り、親爺と顔を合すのが厭でならなかつた」（同、三一九頁）等とあり、主人が機に乗じて銀子を強姦したことが暗示されている。

それからほどなくして磯貝の妻である「マダム」が病気のために急逝するのだが、「マダム」は亡くなる前に、自分の後釜になって商売を受け継ぐよう銀子に言い遺した。銀子に好意を持つ磯貝は、置屋の近くに家を借りて銀子の家族を、隣の一棟には銀子を住まわせて世話をした。銀子は磯貝を疎ましく思いながらも、「少し我慢さへすれば、（略）何でも言うことを聞いてくれ」る磯貝の好意に乗じた。他方で、銀子は客である若い医師の栗栖と関係を深めた。栗栖は銀子を身請けして結婚する可能性も仄めかしたが、磯貝は嫉妬心から栗栖と銀子との関係を妨害し、栗栖も磯貝との関係を有耶無耶にする銀子を詰った。やがて銀子は栗栖と磯貝との三角関係に嫌気が指して藤本を辞め、家族もろとも蓮池の住まいを引き払った。

銀子がI―町の分寿々廼家から芳町の春よしに住み替えたのは、パトロンの倉持が結婚したためである。倉持は銀子との結婚を望んでいたが、家柄の違いから周囲の理解を得るのは困難だった。倉持は当面、銀子に家を持たせて、その家に通うことを持ちかけたが、銀子は「妾がきらいなのよ」と言って倉持の提案を拒んだ。その後まもなく倉持は高利貸しの娘と結婚した。銀子は倉持の結婚を報じる新聞記事を読んだ後、やけ酒をあおり、実家と桂庵に手紙を出して住み替えの手配をした。

見てきたように、銀子が藤本を辞め、分寿々廼家から春よしに住み替えをした理由は、いずれも客や主人との愛情関係の縺れによる。もちろん、三角関係にあるからといって条件の良い客との関係を自ら断ち切ったり、パトロンと結婚できないからといって即座に住み替えたりするのは、芸妓の行動として必ずしも一般的とは言えないかもしれない。しかし、芸妓が客や主人との愛情関係を理由として芸妓置屋を移ったり辞めたりすることは珍しくない。『爛』のお増は、田舎で「茶屋奉公」に出たばかりの頃、お茶屋の若旦那との関係が町で噂になったために住み替えを余儀なくされている。

そもそも「遊女」に限らず、女性は男性との関係から職業や職場を変わることが少なくない。ここで『あらくれ』のお島の場合を見たい。幼い頃に金持ちの農家に養女に出されたお島は、養父の甥との結婚を拒否したために家を出ることを余儀なくされた後、缶詰屋の主人である鶴さんの後妻となる。しかし、夫の浮気や、お島の嫉妬が原因となり、一年足らずで離婚する。その後、お島は兄が手がける植木商の仕事を手伝うために「或山国の町の一つ」に行く。ところが兄は女の後を追って町を出

てしまい、お島は兄の残した借金の形にされて旅館の女中として働くこととなる。その旅館（浜屋）で、お島は病妻を持つ若主人（以下、浜屋）と恋仲になる。浜屋は外聞を憚り、お島を「山の或温泉宿」に移すものの、まもなく実父がお島を連れ戻しに来る。浜屋は実父の前でお島を囲うと言い出すが、お島は「人の妾なぞ私死んだつて出来やしない」と言って浜屋の提案を拒否する。東京に戻ったお島は、下谷で暮らす伯母の下で裁縫の賃仕事の手伝いをするようになる。やがてお島は伯母の元に出入りする裁縫師の小野田の仕事を手伝うようになり、紆余曲折の末、小野田と結婚して洋服屋を開業する。

『あらくれ』において、お島の経験する職業は缶詰屋、植木商、旅館の女中、裁縫師、洋服商であるが、結婚を含めて男性との関係は、お島に転職を促す主な要因として機能している。お島は結婚によって缶詰屋の女主人になり、離婚によって缶詰屋を去る。また、旅館の女中になった後、主人の愛人になり、温泉宿に移される。一方で、主人との関係を清算すると同時に温泉宿の女中をやめ、東京に出て新しい仕事を始める。

5　職業としての妻業・妾業

見てきたように、女性の職業選択は家庭（実家）の経済的事情に加えて男性との関係に左右されやすい。男女関係は本質的に不安定である上、男性中心の社会構造下では男性が主導権を握る場合が多い。これらのことは結果として、女性の職業的地位の不安定性を助長する。中でも、結婚や離婚は女性の職業に決定的な影響を及ぼす。今日でも、女性が結婚によって仕事をやめ専業主婦になったり、夫の仕事を手伝うようになったり、新居から通勤できる職場に移ったりするケースは珍しくない。他方で、配偶者との離別や死別は、しばしば女性に再就職を促す。

お島や銀子にとって結婚は職業遍歴の一コマである。彼女らにとって結婚は生計を得る手段として機能している。また、両者は家庭内の再生産労働の担い手であり、家業を支える労働力でもある。お島や銀子のケースに限らず、妻業は女性が従事する最もありふれた職業の一つと言える。秋聲の作品は、下層階級出身の女性にとって結婚が必ずしも「永久就職」とはなり得ないこと、妻業は他の職業に劣らず不安定な職業であることを暴露している。

同様に、妾業も女性にとって職業に近い役割を果たす。しばしば女性は妾となることで、それ以前に従事していた仕事を辞め、愛人の経済的な庇護の下におかれる[24]。しかし、妾の地位は妻のそれと比べていっそう不安定であり「永久就職先」とは

なりにくい。「日陰者」としてのネガティブなイメージもつきまとう。たとえば、永井荷風『腕くらべ』（一九一七年）の駒代が、パトロンの吉岡の妾になるよりも、吉岡の世話を受けながら「自前」で芸者を続ける方が望ましい選択肢だと考えるのは、「藝者をよしてお妾になつた暁旦那に見捨てられゝば又しても、今度は三度目の藝者に立ち戻るような困つた事にな」りかねないからである[25]。駒代は、一九歳の時に身請けされて結婚したものの、三年後に夫と死別して芸妓稼業に立ち戻った前歴の持ち主である。『縮図』の銀子や『あらくれ』のお島も妾になることを頑なに拒否するが、それは妾となることのデメリットをよく理解しているからであろう。

『縮図』には妾の地位の不安定性も描かれている。銀子が看板を借りていた松の家の、かつての女将である小菊は、主人の松島の妾であった。秋聲の作品では主人公のみならず脇役の女性の人生も詳しく描かれることがよくあるが、小菊もその例外ではない。小菊は一二、三歳の時、両親の手で安房の那古の芸妓置屋に売られ、芸妓として稽古を積んだ。小菊は、その七年後に赤坂の置屋に住み替えを行い、座敷で松島と知り合った。やがて小菊は、芸妓稼業から足を洗い、松島の世話を受けて母や弟妹と一緒に湯島で暮らすようになったが、松島の援助が十分でなかったため芸妓稼業に戻った。その後、松島は愛人の一人である「春日町のマダム」からの出資を得て小菊に松の家を開業させた。松の家は繁盛したものの、松島が小菊の異母妹である品子と恋仲になったため、小菊はそのことを苦にして自殺した。その後、品子は松島が亡くなるまで松の家で松島と同居し、松島に溺愛された。なお、松島には松の家の近くに住む正妻もいた。

結果的に、小菊は松島の妾と松の家の女将の座を異母妹である品子に奪われたことになる。小菊は「失業」する前に自殺してしまったが、妻や愛人が夫や愛人の新しいパートナーに妻や妾の座を奪われ、「失業」することも珍しくない。

他方で、『爛』には妻の座をめぐる女性同士のライバル関係が描かれている。本作において、浅井がお増を身請けした際、浅井はお増に対して妻がいることを知らせず、妻のお柳に対しても、お増の存在を隠していた。しかし、やがて両者は互いの存在を知る。浅井が妾宅を本宅の近くの赤坂に移す頃には、浅井の気持ちは完全にお増に移っており、そのためにお柳は「持病のヒステリー」を悪化させた。その後、お柳の兄が弁護士を間に入れて浅井に高額の手切れ金を支払わせ浅井とお柳を別れさせるが、お柳は狂気に陥り死んでしまう。

浅井とお柳の兄の間に入った小林弁護士は、お増に対して「奥さん、今夜から貴女は安心して寝られますよ」、「その代り、

今度は貴女の番ですよ。私が明言しておく」（傍線引用者）と断言する（『全集』第十巻、三六頁）。実際に、多情な浅井は、お増の他に複数の愛人を持ち、お増の遠縁の若いお今とも男女の間柄になる。ただでさえ健康不安を抱え、年齢による容姿の衰えを自覚するお増は、いずれ浅井のパートナーの座を追われるのではないかという不安に苛まれる。お増は、「気の狂つて死んだ」お柳に自分を重ねる一方で、「いつ棄てられても、困らない」ように「金や品物などを用意することを怠ら」ない。物語の終盤で、お今は同郷の男と結婚するものの、浅井の新たな「情婦」の存在が浮上する。その「情婦」は「この頃色稼業を止めて、溜めた金で、芝の方に化粧品屋を出した女」だった。浅井が「お柳のゐた頃」のお増にしたように、「情婦」のところに「株券や貴重な書類の入つた手提金庫などを運んでゐること」が発覚する。さらに「情婦（をんな）」の母親が「奥さんにお昵近（ちかづき）になりたいといつて」挨拶に来たことから、お増は「疑惑」を募らせ、小林弁護士の「讖言（しんげん）」が「到頭自分の身のうへに当つて来た」という思いに囚われる。お増は、かつて浅井の妻のお柳が自分にしたように、「情婦」が営む店の近所を「長いあひだ往来（ゆきゝ）」する（同、七一―七二頁）。

『爛』は、女性が愛人の妾や妻の座を奪ったとしても、いずれは別の女性に妾や妻の座を奪われることを示唆している。生産労働に従事していた女性が、妾や妻となり愛人や夫の経済的庇護の下に置かれたとして、その女性が妾や妻の座を追われたならば、再び生産労働に従事することを余儀なくされるだろう。妻業や妾業を一職業として組み込む形で、女性の職業遍歴は続いていくわけである。

6 「遊女」の再生産

ところで、元「遊女」が妾や妻の座を追われた場合は「遊女」稼業に戻る場合が少なくない。もっとも、その場合の「遊女」稼業とは芸娼妓や酌婦等とは限らず、条件に恵まれれば[26]、芸妓置屋や待合の女将やバーのマダム等になる場合もある。これらの職業は、芸娼妓や酌婦に比べると年齢の制約が緩やかであり、それゆえに長期的な「遊女」の再生産に寄与している。

秋聲は『縮図』において、芳町の春よしの女将である芳村民子が女将になるまでの「放浪生活」を詳しく描いている。民子は少女時代を東京で「堅い屋敷奉公」をして過ごした後、裕福な元士族の家に嫁入りしたが、夫を戦争で亡くしたショックのため「神心を喪失して脳病院に担ぎこまれ、そこで流産した」。その三年後、病から快復した民子は「玉の輿に乗る」つもりで新橋で芸妓となった。しかし「俄仕込」の民子に新橋の芸妓は

勤まらず、民子は「河岸をかへて北海道へと飛び、函館から小樽、室蘭と精々一年か二年かで御輿をあげ、そちこち転々した果に樺太まで乗し、大泊から汽車で五六時間の豊原で、有名な花屋に落ち着いたのだつたが、東京へ舞ひ戻つて芳町へ現はれた自分は、もう三十の大年増であり、そこで稼いでいるうちに、米屋町で少しは名前の通つた花村という年輩の男を物にし、花村がちやうど妻と死別れて、孤独の寂しさを身にしみて感じてゐた折なので、家へ入れる約束で、金を引き出し、兎に角自前となつて一軒もつことになつた」（『全集』第十八巻、三六六頁）という。

ちなみに、芸妓置屋の女将やバーのマダムは、抱えの芸妓や女給に対しては雇主の立場にあるが、通常の「経営者」のイメージで捉えることが相応しくない場合もある。たとえば小菊は松の家の女将であったが、松の家の経営上の主導権を握っていたとは考えにくい。小菊が自ら座敷に出る芸妓であったことも考慮すると、主人の松島と小菊の間には経済的な搾取関係があったとも考えられる。

さて、先ほど元「遊女」が妾や妻の座を追われると「遊女」稼業に戻る場合が多いと述べたが、銀子の場合は木元と離婚した後に芸妓稼業に戻ってくる（婚姻中は芸妓を廃業していたものの、しばらく家計を助けるために銀座のカフェーの女給として働いていた）。作中では、結婚生活が破綻し芸妓稼業に戻ることを余儀なくされたことが、銀子にとって大きな痛手であったことが強調されている。

（前略）結婚の破綻で、女にしては最も大切な時代の四年を棒に振つたことは、何と言つても心外であり、再び振返らうとも思はなかつた、元の古巣へ逆戻りした以上、這ひあがるためには何か摑まなければならなかつた。この世界では、二十二三ともなれば、それはもう年増の部類で、二十六七にもなれば、お婆さんの方で、若い妓の繋ぎに呼ばれるか、遊びに年期の入った年配者の座持に呼ばれるくらゐが落であり、男に苦い経験のある女が男を警戒するやうに、女に失敗した男は用心して深入りしず、看板借ともなれば、何んな付物があるか解らなかつた（同、二九二頁）。

その後、銀子は均平と所帯を持つが[27]、再び芸妓稼業に戻ってくる。均平は、置屋経営の困難に直面し弱音を吐く銀子に対して、「君はやつぱりこの商売に取りついて行くんだ。泥沼のなかに育つて来た人間は、泥沼のなかで生きて行くより外ないんだ」（同、二七四頁）という言葉を投げかける。この言葉か

ら、いわゆる「泥水稼業」に馴染んだ女性は、それ以外の世界で生きるのは困難だとする考えを読み取ることができよう。

ちなみに、「二つの現象」でも、秋聲の分身である登場人物によって同様の考えが表明される。「二つの現象」は、長男の一穂（作中では庸一）が玉の井の酌婦（作中では雪野）の逃亡を助けた事件をふまえて書かれた作品である。雪野は警察の助力も得て一旦酌婦を廃業したにもかかわらず、自ら抱え主のところに戻ってしまう。そのことを知った庸作（庸一の父親）は庸一に対して、「矢張りあの人の運命なんちやないか、そこへ還つて行くのは」と述べる（『全集』第十七巻、一六七頁）。

もっとも、庸作は「遊女」が「遊女」稼業から「足を抜くこと」が困難な理由を、「遊女」本人に帰結させているわけではない。作中では、庸作の視点から、女性を「遊女」稼業にはまり込ませる「悪徳」が、「長い間の習慣性になつてゐる親たちの利己心と、さういふことを商売にしてゐる人達との結び会ひによつて行はれる」（同、一六四頁）という考えが示されている。さらに、庸作は「一度そんな烙印を捺されると、どこの社会でも女として通用しなくなるのが普通」（同、一六五頁）とも述べ、社会による烙印が女性の「遊女」稼業からの足抜けを困難にしているという見方をしている。以上は『縮図』の銀子についても当てはまる。『縮図』において、芸者が嫌いだと繰り返し表明する銀子を芸者稼業に駆り立てるのは家族であり、家族は芸妓は恥ずべきものだという烙印を内面化しながら、確信犯的に銀子に犠牲を強いている[28]。

ともあれ、「遊女」の人生をめぐる秋聲の見方は悲観的なものである。「二つの現象」の庸作は次のように考える。

> 出発点と環境とが、屡々女の一生を決定する。そして小さい自分からそんな境涯におかれた女が、他の社会へ交りこんで生きて行くのには、余程運が好くて、若いうちに結婚の好い相手を見つけるか、金持の翫弄に甘んじてゐない限り、矢張りさうした雰囲気のなかに生きて行くより外ないのであつた。（同、一六七頁）

7　未完の物語、終わらない職業遍歴

見てきたように、「遊女」の職業遍歴は、その過程に妻業や妾業を組み込みながら、また年齢等の条件によって芸娼妓や酌婦から芸妓置屋や待合の女将やバーのマダムに職種を転じながら続いていく。芸妓から妻へ、妻から芸妓へ、芸妓から芸妓置屋の女将へ、という銀子の職業遍歴は、靴職人の経歴が差し挟まれることを除けば、珍しいものではなかろう。

なお、物語の現在における銀子の職業上の立場は、ある程度安定しているように見える。しかし、性風俗業は「水商売」と言われる通りに不安定である上、銀子の営む芸妓置屋の経営基盤が特別に盤石であるようには見えない。第六章「裏木戸」（二）では置屋経営の困難が強調され、「資本の薄いものはたちどころに息づまってしまう」と書かれているし（『全集』第十八巻、三六六頁）、春よしの女将の民子の末路について、「辣腕を揮ひつくした果に、負債で首がまはらず、夜逃同様に土地を売ることにな」り、現在は「大阪へ落ちて行つたとばかりで、消息も知れない」とする言及もある（同、三六五頁）。これらを考え合わせると、銀子が今後も同じ芸妓置屋の女将でいられるのかは不確かである。また、年代記小説の部分は銀子の病気が快復して芸妓稼業に戻るところで中断されており、木元と結婚するまでの数年間は空白となっている。銀子の職業遍歴は反復を伴いながら果てしなく続いていく印象を与える。

もっとも、秋聲の作品の中で、こうした読後感を与えるのは未完に終わった『縮図』のみに限らない。先述のとおり、『爛』では、終わりの方で、浅井の新たな「情婦」の存在がクローズアップされる。物語は、お今の結婚式に夫婦で出席したお増と浅井が帰宅し、「「私達も、あの人を頼んで、一度お杯をしてみたいぢやないの。」／お増は晴々した顔をして、奥へ著替に立つて行つた」（『全集』第十巻、七七頁）という一節で終わるのだが、「情婦」の存在がもたらす結婚生活の危機は解消されないままである。作品は浅井、お増、「情婦」をめぐる物語の次の展開を示唆しながら、物語を中断するような仕方で終わっている。こうした消化不良にも見える『爛』の結末は、下層階級の女性にとって結婚が「永久就職」になりにくいことをふまえるならば、現実描写として優れている。なお、浅井が、お増と離婚して「情婦」を妻に迎えたならば、お増は「遊女」稼業に戻る可能性が高いだろう。

このような結末らしからぬ結末と終わらない職業遍歴との呼応は、『あらくれ』にも見られる。『あらくれ』において、お島と小野田が開いた洋服店は、中学校の制服の販売に活路を見出して繁盛するが、物語は次なる展開への含みを残して終わる。作品の終盤で、お島は小野田の留守中に温泉場を訪れ、店で働く若い職人と小僧の順吉を呼び寄せる。そこでお島は、二人に対して、「事によつたら、上さんあの店を出て、この人［引用者注――若い職人］に裁をやつてもらつて、独立でやるかも知れないよ」（同、三三七頁）と打ち明ける。お島と小野田の夫婦関係は、性的不調和や小野田の女性関係によって亀裂が入っており、近い将来に、お島が小野田と別れて「独立」する可能性は大いにある。なお、この若い職人は小野田よりも職人

としての腕が立つことが示唆されており、お島にとって「独立」はステップアップともなり得る。ただし、お島の浮き沈みの多い人生を考えると、「独立」が成功裡に終わるとは限らないし、実際に、お島のモデルとなった女性は「独立」を試みて失敗したという[29]。お島の物語は未完であることを宿命づけられている。


図2


図1

最後に、新藤兼人監督による映画『縮図』（近代映画協会、一九五三年）に触れておきたい。映画『縮図』は原作小説の年代記小説の部分に基づいて時系列に沿って進み、銀子の病が快復して再び座敷に出るところで終わっている。映画の内容は比較的原作に忠実だが、乙羽信子演じる銀子が座敷で客と狐拳をする終盤のシーンは原作にはない。他方で、序盤に登場する狐拳のシーンは原作に基づくものである。先述のとおり、原作では、藤本の抱え芸妓となって間もない頃の銀子が客と狐拳をして酔い潰れ、主人の磯貝に強姦されることが示唆されていた。


図5


図4


図3

映画の序盤の狐拳のシーンでは、三味線の演奏とかけ声をバックに、狐拳に興じる銀子と客の切り返しショットとマスターショットが組み合わされ（図1、図2）、時折、負けた側が罰として服を脱いだり酒を飲んだりするショットが差し挟まれる。終盤における狐拳の描き方も、序盤のそれとほぼ同様である。まず、狐拳に興じる銀子と客の姿が切り返しショットとマスターショットの組み合わせにより映し出された後（図3、図4）、この客が別室でお灸を据えている女将に「銀子の世話をしたい」と申し出るシーンが差し挟まれる（三味線の演奏は続いている）。その後で、銀子が別の客と狐拳をするシーンに切り替わる。最後は、切り返しショットからマスターショットに移行した後、カメラがゆっくりパンして銀子の内面にせまるかのようなクロースアップで終わる（図5）。

これらの序盤と終盤の狐拳のシーンは、場所と客の顔ぶれには違いがあるが、宴席で客に接待する銀子の姿に大きな違いはないため、観客は既視感を覚えずにはいられない。客を変えながら果てしなく続く狐拳の反復的な動きと相俟って、芸妓稼業の反復と終わりのなさを印象づけるエンディングとなっている。

8　おわりに

本稿では、『縮図』における銀子の職業遍歴について検討した。銀子の職業遍歴は、柳橋（江東橋）→千葉・蓮池→Ｉ町（石巻）→芳町→錦糸堀→芳町→浅草→深川→白山への居住地の移動も伴っている。その点も含めて銀子は「放浪する女」と言えるだろう。

かつて水田宗子は有名な林芙美子論の中で、『放浪記』と『浮雲』を「女の放浪」をテーマとした作品として位置づけつつ、「放浪する女」を「結婚という制度によって確保される、家の中という女の居場所、母や妻や娘という女の従来の役割からはみ出した女」として捉えた[30]。水田は、あたかも林芙美子が「定住を拒否」した例外的な女性を描いているかのように論じている。「放浪する女」が家を「女の居場所」とする規範に外れていることは確かだが、果たして近代日本において「放浪する女」は例外的な存在だったのだろうか。フィクションの世界はともかくとしても、現実には、少数ではない下層階級の女性が自活するため、あるいは家族を養うために放浪を強いられたことを見過ごすことはできない。

銀子が芸妓を嫌いながら芸妓稼業を続ける理由は自活するため、そして家族を扶養するためであった。銀子の放浪する人生を描く『縮図』は、銀子の放浪が職業遍歴にほかならないことを見据える点で、「遊女」を労働者として描く作品と言えよう。なお、秋聲がこのような作品を書き得た背景として、小林政子を始めとする下層階級出身の女性との深い関わりと、実在の人物を登場人物のモデルに据えて、その人物がたどった人生の軌跡を詳細に描き込もうとする自然主義的な作風を指摘することができる。秋聲においてこれらは、女性の居場所は家庭であるというような固定観念の介在を抑制する意味を持ったと考えられる[31]。

1『徳田秋聲全集』第十八巻、八木書店、二〇〇〇年所収。本稿における徳田秋聲の作品の引用は、全て『徳田秋聲全集』による。本文中に引用箇所を示す場合は、『全集』と略記する。引用の際、ルビは適宜省略する。

2　書籍化の際、新聞に掲載された八〇回分に、「新聞社から原稿のまま

戻つて来てゐた八十一回」と「本棚の中から出て来た八十二回の書きかけの原稿」が加えられた（徳田一穂の『縮図』跋文による、『全集』第十巻、解題三八頁）。

3『徳田秋聲ノート　現実密着の深度』中央大学出版部、一九七二年、五七頁。

4『徳田秋聲全集』第十巻、八木書店、一九九八年所収。

5『徳田秋聲全集』第九巻、八木書店、一九九八年所収。

6 同。

7 拙稿「徳田秋声『あらくれ』におけるお島　その職業遍歴と男性遍歴」『散文誌　隣り村』別巻、二〇二四年六月。

8 徳田秋聲の作品では、しばしば芸娼妓、酌婦、料理屋の女中などの仕事が曖昧な言葉で表現され、職業や職種が明確にされないことがある。本稿では、こうした接客業に従事する女性を「遊女」と総称する。なお、芸妓、芸者、娼妓、酌婦、私娼などの言葉には差別的な含意が含まれることがあるが、本稿では歴史的用語としてそのまま用いている。読みやすさを考慮して括弧は用いない。

9 前掲『徳田秋聲全集』第十巻所収。

10『徳田秋聲全集』第七巻、八木書店、一九九八年所収。

11 秋声と政子の関係については、小林政子「「縮図」のモデル・銀子――徳田秋聲先生の思い出――」『読売評論』二巻五号、一九五〇年五月、野口冨士男『徳田秋聲伝』筑摩書房、一九六五年、第七章、「年譜」『徳田秋聲全集』別巻、八木書店、二〇〇六年などを参照。

12 政子は『縮図』の主人公の銀子について、「およそ完全にわたしをモデルにしたもので、銀子という女主人公以上の人物のことも、銀子であるわたしの口から先生に語られたとほりのまま書かれてある」と述べている。前掲小林「「縮図」のモデル・銀子」、一一九頁。

13 柘植そよについては、前掲野口『徳田秋聲伝』を参照。

14 浪江洋二「「縮図」モデル考――徳田秋声と小林政子――」『国文学解釈と教材の研究』一六巻一四号、一九七一年一一月など。

15 この事件を描いた作品に、「二つの現象」（『婦人之友』一九三五年五月号）がある。他方で、徳田一穂は、この事件の顛末を、「縛られた女」（『新潮』一九三六年一月）、「鰺ヶ沢」（『新潮』一九三七年一月）、「無心邂逅」（『文藝』一九三九年八月）、「北の旅」（『新創作』一九四二年三月）などの「利枝もの」と呼ばれる一連の作品に描いている。「利枝もの」については、大木志門「徳田一穂と徳田秋聲――父子作家の文学的闘争と交響――」『法学新報』一二八巻七・八号、二〇二三年一二月を参照。

16 挿絵担当の内田巌の証言。松本徹『徳田秋聲の時代』鼎書房、二〇一八年より孫引き（一四九頁）。

17「死に親しむ」から「二つの現象」までは、『徳田秋聲全集』第十七巻、八木書店、一九九九年所収。「チビの魂」から「のらもの」までは、前掲『徳田秋聲全集』第十八巻所収。

18 便宜的に通しで章番号を振った。

19 『仮装人物』と「縮図」」前掲野口『徳田秋聲ノート　現実密着の深度』、二〇八―二〇九頁。

20 結婚が破綻した時点の銀子の年齢は「二十六、七」とされている。

21 前掲「一つの好み」では、小林政子をモデルとする正子について、「十三四の時分」に「東京一といはれる職人であり卸し屋であつた工場に入つて、男達の中に交つて、皮を裁つことや縫ふことを教は」り、「相当好い腕前になつた」にもかかわらず、「子供の多い家庭の事情は、目だるつこい靴なぞ縫つてゐることを許さなかつた」と記述している。『徳田秋聲全集』第十七巻、七五頁。

22 前田真理は、銀子が「自ら納得して一家の柱の役割を引き受けている」ことをふまえつつ、銀子の職業遍歴を「男達の間でもみくちゃになった末に親元へ帰って行き、また生活のために出て行くという往復運動の過程」として捉えている、「『縮図』考――二つの家について――」紅野敏郎編『論考徳田秋声』桜楓社、一九八三年、一九〇―一九一頁。

23 銀子は藤本の前に人形町の芸妓置屋にいたようだが、詳細が語られていないので省略する。

24 本稿では、妾という言葉を「正妻の外に、養い愛する女」（『日本国語大辞典・第二版』小学館（デジタル版））の意味で用いている。石島亜由美は『万朝報』一八九八年七月七日から九月二七日まで連載された「弊風一斑　蓄妾の実例」で取り上げられている妾の出自（出身）の中で芸妓が最も多かったことを明らかにしつつ、芸妓を「妾の生産装置」だと主張している。『妾と愛人のフェミニズム近・現代の一夫一婦の裏面史』青弓社、二〇二三年、第一章。なお、石島は、明治の文学作品が描く妾像についても考察している。

25 永井壯吉『荷風全集』第十二巻、岩波書店　一九九二年、四九頁。タイトルは『花柳小説　腕くらべ』。

26 一方、年齢を経るに従い「商品価値」が低下して「転落」する「遊女」も少なくない。林芙美子は短編小説「牛肉」に、本牧の高級娼婦であった満喜江が吉原の場末の妓楼の娼妓へと身を落とす過程を描いている。「林芙美子「牛肉」論――「遊女」の転落物語」『北海道大学文学研究院紀要』第一七五号、二〇二五年三月。

27 政子も秋聲と同棲したが結婚には至らなかった。松本徹は二人が結婚しなかった理由について、「政子が一家の戸主で、扶養の義務を負っており、両親が秋聲との結婚を認めなかったこと、政子自身、秋聲宅に籠もっていることに倦んだためらしい。秋聲にしても結婚を考えたものの、歳が三十二も下となると、政子の将来を考え、是非ともというわけにいかなかったと思われる」と述べている。前掲『徳田秋聲の時代』、一五〇頁。

28 銀子の母親は、「印台の金の指輪など指に嵌めて、お詣りでもして歩きたい風で、家の暮しも小楽らしく何彼と取繕ひ、芸者をしている

娘から仕送つてもらっていることなどは、叭にも出さな」い。また、妹たちは「姉の身のうえを恥づ、学校でも勤め先でも、秘し隠しに隠」している。『全集』第十八巻、三三八頁。

29 秋聲は「「爛」と「あらくれ」のモデル」（『新潮』一九一五年一〇月一日）において、お島の職業遍歴と男遍歴が、ほぼ事実に即していることを暴露した上で、「『あらくれ』は小野田に別れて、新しい男に密通かうとして居るところまでしか書いていないが、実際はあれからが面白い。例の気性で自分一個で独立して事業を遣ろうとしては、失敗して了ふ。其の点を悟つて書かうとしたのだが、長くなつたので止した」と述べている。『徳田秋聲全集』第二〇巻、八木書店、二〇〇一年、四三頁傍点原文。なお、『あらくれ』のモデルは義弟小澤武雄が内縁関係を結んだ鈴木ちよであることが知られている（前掲野口『徳田秋聲伝』）。

30 「放浪する女の異郷への夢と転落――林芙美子『浮雲』」『二十世紀の女性表現――ジェンダー文化の外部へ』學藝書林、二〇〇三年、二三三頁。

31 もっとも、自然主義が女性のステレオタイプ化と無縁だったと言いたいわけではない。倉田容子は、田山花袋『生』等の「老女」を描いた作品を俎上に挙げながら、自然主義の方法論は封建的な規範を相対化する反面、ジェンダー化されたエイジング表象を帰結したと主張している。『語る老女　語られる老女――日本近現代文学にみる女の老い』學藝書林、二〇一〇年、Ⅱ第二章、第三章。他方で、金井景子は、秋聲が小林政子から「十年の歳月を費やして」話を聞き続けたこと」を評価しつつも、「女の口からもたらされたもっともプライベイトな物語が、共に暮らす男のペンによって編集され、新聞という社会の公器に延々と開陳される残酷」について指摘すると同時に、作中において銀子から話を聞き出す均平が中立的な聞き手ではあり得ないことについて注意を促している。「聴く男・語る女・書く男性作家――徳田秋聲『縮図』を読む」江種満子ほか『男性作家を読む　フェミニズム批評の成熟へ』新曜社、一九九四年。